ボランティア部門 受賞者

鳥居 晴美

NPO法人子供地球基金 創設者・代表

アートで子どもの心の回復を支え、支援の循環を世界に広げる

鳥居 晴美
Harumi Torii

NPO法人子供地球基金
創設者・代表

1955年東京都生まれ。白百合女子大学仏文科卒業。専業主婦から幼児教育者へ転身し、1985年に表現教育に特化した幼稚園「ユニダインターナショナル」を開校。1988年、「Kids Helping Kids(子どもたちが子どもたちを救う)」を理念にNPO法人子供地球基金を設立。世界57カ国で3,700回以上のアートワークショップ、3,000回以上の展覧会を開催し、12カ所に「キッズ・アース・ホーム」を設立。戦争・災害・貧困・病気など過酷な環境にある子どもたちの心のケアと自立支援を続ける。活動は国内外で高く評価され、日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー、社会貢献者表彰、Woman Innovation of the Yearなど多数受賞。2018年には子供地球基金がノーベル平和賞候補に選出された。

推薦者 | 栗原 正利　公益財団法人日産厚生会　玉川病院　気胸研究センター　名誉気胸研究センター長

「ないなら自分で作る」の信念

1955年東京に生まれた鳥居晴美氏は、専業主婦から社会起業家へと転じ、自らの信念を次々に形にしてきた。庭に大きな木製のキリンや馬を手作りし、必要とされれば英語が通じる美容室まで自ら立ち上げる——そうした「ゼロからイチを生み出す」母の姿を、幼い頃から間近に見て育った。鳥居氏は「影響を受けた人は母です」と語る。その創造力と行動力は、鳥居氏が思い立ったことを形にしていく原点となった。

息子のために理想の幼稚園を探す中、どこへ行っても同じ絵が壁に並ぶ光景に違和感を覚えた。「一人ひとり違う見方があるはずなのに」。妥協しない性格もあり、「ならば自分で作るしかない」と決意。周囲の反対にもひるまず、23もの金融機関を回って資金を調達し、1985年に表現教育に特化した幼稚園「ユニダインターナショナル」を開校した。子どもが自分の力で考え、行動し、社会に還元する存在であってほしい——その信念が、鳥居氏の歩みを形づくることになった。

この理念は1988年、「Kids Helping Kids」を掲げた子供地球基金の設立へと結実する。きっかけは、息子が4歳のときに描いた『ハッピーバースデーアース』の絵だった。地球に星と太陽が水と緑をプレゼントするその絵に、鳥居氏は「子どもの発想や優しさが社会を変える力になる」と確信した。子どもたちが描いた絵は展覧会や商品デザインとして発信され、その収益が別の地域の子どもを支援する「優しさの循環」を生み出している。

アーティストとして活動する息子・志村星氏が4歳のときに描いた『ハッピーバースデーアース』。子どもが子どもを支える「Kids Helping Kids」の原点となった一枚。

世界の最前線で子どもたちの心に寄り添う

2023年モロッコ地震後のワークショップ。黒い絵の具で心の闇を描く子も受け止めつつ、前へ進む力を育むため、大きな布で明るい世界を描けるように準備している。

鳥居氏の支援は、常にアートワークショップを中心に展開されてきた。その活動は世界57カ国で3,700回以上に広がり、クロアチア紛争、カンボジアやベトナムの貧困地域、トルコ・シリア地震、東日本大震災、能登半島地震、そして近年のウクライナ、イスラエル、ガザ地区に至るまで、危険や困難の大きさに臆することなく自ら現地に赴き、子どもたちとともに絵を描き続けてきた。2026年6月のベネズエラ地震後も翌月すぐに現地を訪れ、避難所と小学校で計9回のワークショップを行った(左頁写真)。戦地ではあえて大きな紙を持参し、思いきり描ける環境を整える。「人は、何かを始める前に心を整えないと動き出せない」。絵を描く行為そのものが、子どもたちの心をほぐし、現実を受け止める力につながると感じてきたからだ。

こうした活動は、世界12カ所に設立された「キッズ・アース・ホーム」という居場所づくりにも広がった。紛争や災害、貧困に苦しむ子どもたちが安心して活動できる空間は、鳥居氏が世界各地で積み重ねてきた支援の象徴となっている。

活動の広がりは、アートが社会や世界を実際に動かしうることも示してきた。湾岸戦争時には、幼稚園の子どもたちが描いた絵と手紙を、米国のジョージ・ブッシュ大統領とイラクのサダム・フセイン大統領に送り、双方から返事が届いた。

「思ったら一歩踏み出す。諦めないことが大事」。批判や困難さえも自らの糧とし、思いを形にしてきた鳥居氏の姿勢は、これからも世界中の子どもたちに希望を届けていく。